

Title	懐徳堂展と資料修復
Author(s)	湯浅, 邦弘
Citation	懐徳堂研究. 2011, 2, p. 3-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24649
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

懷徳堂展と資料修復

湯浅邦弘

一、懷徳堂展の構想と準備

平成二十二年十月二十六日、大阪歴史博物館八階特集展示室には、心地よい緊張が走っていた。翌日から始まる懷徳堂記念会創立百周年記念「懷徳堂展」の準備作業が行われていたのである。

昭和二十年（一九四五）、大阪大空襲により学舎を失った懷徳堂記念会は、焼失を奇跡的に免れた貴重資料約三万六千点を、昭和二十四年、一括して大阪大学に寄贈した。大阪大学では、それらの資料を「懷徳堂文庫」と命名し、以後、文学部や附属図書館において大切に保管してきた。だが、常設展示の場を持たない大阪大学では、これらの貴重資料を一般に公開することは、これまでほとんどなされてこなかった。

そのような中で、懷徳堂記念会創立百周年記念事業の一環として、開催期間二ヶ月に及ぶ資料展が企画された。懷徳堂記念会の幹事会で大卒の了承を得た後、大阪大学総合学術博物館橋爪節也教授の仲介で、大阪歴史博物館の学芸課長伊藤廣之氏、同学芸第一係長伊藤純氏、同学芸員井上智勝氏に面会したのは、平成二十一年十二月十一日のことであった。

そこで、会場予定とされた歴博八階の特集展示室を拝見し、展示すべき資料のおおよそのイメージをつかんだ。そして、主催を大阪大学・大阪歴史博物館・懷徳堂記念会の三者とすること、会期を平成二十二年十月二十七日から同年十二月二十日までとすることなどが仮決定し、実務面・予算面における分担について今後詳細を検討していくこととなった。（写真1）

平成二十二年に入り、具体的な作業が進んでいった。

まず、大阪歴史博物館の井上学芸員が懷徳堂資料の実物を閲覧するため、六月八日に阪大に來学され、筆者と橋爪教授、および大阪大学文学研究科懷徳堂研究センターの福田一也職員が附属図書館六階貴重図書室において資料解説を行った。

その席上、展示関係では、展示構成案およびコーナー名、出品リストなどを六月末までに確定すること、印刷物関係では、やはり六月末までにリーフレット原稿と広報ポスター原稿、およびチケット原稿を完成させ、七月

写真1 大阪歴史博物館



末までに納品すること、などが確認された。

これに基づき、筆者は、右のすべての原稿、および各資料の解説文（資料に添える題簽原稿）を執筆し、懷徳堂記念会の幹事会で了解を得た後、六月二十九日、資料の画像データを添えて大阪歴史博物館の井上氏に送付した。

その後、リーフレット、ポスター、チケットなどが、原稿の校正作業を経て、次々と完成し、大阪歴史博物館は、八月十一日、懷徳堂展についてプレス発表を行った。いよいよ懷徳堂展の開催が公表されたのである。

二、資料の移送と展示

平成二十二年十月一日、大阪歴史博物館から、資料の移送について、美術運送の専門業者カトーレック株式会社を紹介があった。ただちにカトーレックに移送の予約と見積依頼を行い、大阪大学から大阪歴史博物館への資料移送が十月十八日と決定した。これを受けて、筆者と福田一也職員、および懷徳堂記念会の池田光子研究員の三名が、搬出する資料の点検作業を十月十三日・十四日の両日に行った。

十月十八日午前十時半、移送作業が始まり、その日の午後には、出展資料全点が無事、大阪歴史博物館に到着

し、収蔵庫に収められた。

そして十月二十六日、展示作業の当日を迎えたのである。作業は朝から夜九時までかかった。大きな展示品を運ぶ力仕事から、きわめて繊細な手先の作業まで、展示には細心の注意が払われた。(写真2)

展示コーナーは四区画に分かれており、順に、「一、草創期の懷徳堂」「二、懷徳堂の展開と終焉」「三、よみがえる懷徳堂」「四、懷徳堂の復興と現在」と命名された。展示された資料は次の通りである。

一、草創期の懷徳堂

- 1-1 懷徳堂幅(かいとくどうふく)
 - 1-2 万年先生論孟首章講義
(まんねんせんせいしろんもうしゅしゅうしょうこうぎ)
 - 1-3 多言書幅(たげんしょふく)
 - 1-4 喪祭私説(そうさいしせつ)
 - 1-5 墨菊図(ぼくぎくず)
 - 1-6 懷徳堂定約附記(かいとくどうていやくふき)
 - 1-7 宝暦八年定(ほうれきはちねんさだめ)
 - 1-8 懷徳堂タペストリー
- 二、懷徳堂の展開と終焉
- 2-1 中井竹山肖像画(なかいちくざんしょうざうが)



写真2 展示作業の様子

- 2-2 懷徳堂記額(かいとくどうきがく)
- 2-3 安永七年六月定
(あんえいしちねんろくがつさだめ)
- 2-4 懷徳堂義金簿(かいとくどうぎきんぼ)
- 2-5 非徴(ひちよう)
- 2-6 草茅危言(そうぼうきげん)
- 2-7 中井履軒肖像画(なかいりけんしようぞうが)
- 2-8 論語雕題(ろんごちようだい)
- 2-9 史記雕題(しきちようだい)
- 2-10 解師伐袁図(かいしばつえんず)
- 2-11 左九羅帖(さくらじよう)
- 2-12 越俎弄筆(えつそろうひつ)
- 2-13 木製天図(もくせいてんず)
- 2-14 潮図(ちようず)
- 2-15 袖園先生雜記(ゆえんせんせいざつぎ)
- 2-16 騎馬武者図(きばむしやず)
- 2-17 木司令(もくしれい)
- 2-18 出懷徳堂歌(しゅつかいとくどうか)

三、よみがえる懷徳堂

- 3-1 入徳門聯(にゅうとくもんれん)
- 3-2 婦馬放牛図(きばほうぎゅうず)
- 3-3 聖賢扇(せいけんおうぎ)

四、懷徳堂の復興と現在

- 3-4 華胥国門額(かしよこくもんがく)
- 3-5 宋六君子図(そうりつくんしず)
- 4-1 重建懷徳堂設計図
(ちようけんかいとくどうせつけいず)
- 4-2 重建懷徳堂復元模型
(ちようけんかいとくどうふくげんもけい)
- 4-3 素読出席簿(そどくしゅつせきぼ)
- 4-4 懷徳堂印存(かいとくどういんぞん)
- 4-5 「大阪府學教授」印
(「おおさかふがくきようじゆ」いん)
- 4-6 「積善之印」印(せきぜんのいん)いん
- 4-7 「水哉」印(すいさい)いん
- 4-8 バーチヤル懷徳堂
通路側閲覧スペース(パネル展示)
- 紙製深衣
- 旧懷徳堂平面図
- 方図
- 華胥国物語
- 華胥国物語版木

この内、三の「よみがえる懷徳堂」では、近年の修復作業の実績を示すこととし、修復を終えた実物資料とともに、修復前の状況を示す画像や解説文も掲示することとした。その対象となったのは、平成二十一年に大阪大学後援会の支援を得て修復された貴重資料三十二点、および、平成二十一年度の財団法人朝日新聞文化財団の文化財保護助成に採択された「帰馬放牛図」二幅である。これらの内から「入徳門聯」「華胥国門額」「帰馬放牛図」「聖賢扇」「宋六君子図」の計五点を「よみがえる懷徳堂」として展示したのである。

以下では、その資料修復の実績について、これら五点を含む代表的な資料八点到絞って紹介したい。なお、修復前後の技術的な解説については、修復を担当された株式会社大入の報告書を参考にしている。

三、資料修復の実績

華胥国門額

中井履軒が自宅に掲げた門額。華胥国とは、中国の伝説的な皇帝であった黄帝が夢の中で遊んだという理想国で、そこには身分の上下がなく、民には愛憎の心がなく、利害の対立もなく、自然のままであったという。

↓修復前(図1)

経年の擦れや虫損により、表面が損傷している箇所、下地(杉板)まで見えている箇所があり、特に周囲の劣化が著しかった。

↓修復後(図2)

本紙を下地から解体し、欠損部分に薄美濃紙と生麩糊を用いて繕いを施し、裏打ちした。修復した本紙を下地に貼り込んだ。特に、螺鈿模様が見事に再現された。



図1 「華胥国門額」修復前



図2 「華胥国門額」修復後

帰馬放牛図

谷文晁(一七六三—一八四二)が懷徳堂に逗留した際、描いたふすま絵。「帰馬放牛」とは、『書経』の言葉「武を偃ふせて文を修め、馬を華山かざんの陽(みなみ)に帰し、牛を桃林とうりんの野に放つ」にちなみ、軍事に徴用した牛馬を山野に帰すという意味で、戦国の世を終息させた江戸時代の太平の世を賛美するもの。もともと、懷徳堂のふすま絵として掲示されていたため、著しい経年劣化が見られた。画像の主題の詳細については、拙稿「谷文晁「帰馬放牛図」に描かれた花―懷徳堂展によせて―」(『大阪大学図書館報』第四十四巻二号、二〇一〇年)参照。

↓修復前(図3)

二幅とも本紙のほぼ同位置に大きな欠損や、画面に対して横に走った破断、損傷が見られた。襖から掛け軸に変更するまでに、本紙を二枚重ね、巻いて保存した期間があり、欠損や破断、亀裂はその際にできたと思われる。また、補彩箇所が本紙になじんでおらず、鑑賞の妨げになっていた。

↓修復後(図4)

本紙を表装から解体し、膠水溶液を用いて、墨、彩色の定着の弱い箇所に剥落止めを施した。浄化水と綿棒を用い、旧補彩箇所を除去した。本紙基調色に染め

図3 「帰馬放牛図」(馬図) 修復前



図4 「帰馬放牛図」(「放牛図」部分) 修復後

た繕い紙で欠損部を繕った。繕いを入れた箇所を補彩し、本紙と調和させた。これらの結果、汚れや損傷の印象が薄くなり、構図も細部も明瞭になって、鑑賞に堪えうるようになった。

聖賢扇

中井履軒が扇面の表に歴代の聖賢や学者の名を朱筆し、裏面にはこれらの人々を酒にたとえて面白く評を加えたもの。例えば、「孔孟（孔子と孟子）」が「伊丹極上御膳酒「賞賛に詞なし」と絶賛される一方、「徂徠春台（荻生徂徠と太宰春台）」が「鬼ころし」「あらき計にて酒ともおもほらず」と酷評されている。

↓修復前(図5)

本紙表面の雲母引きが、長年畳まれた状態で固着、剥離していた。本紙に経年の汚れ、変色、亀裂が見られた。

↓修復後(図6)

本紙の裏表を骨から解体し、欠損部を繕って裏打ちを施した。元の骨を使い修復した本紙で扇子に仕上げた。



図5 「聖賢扇」修復前

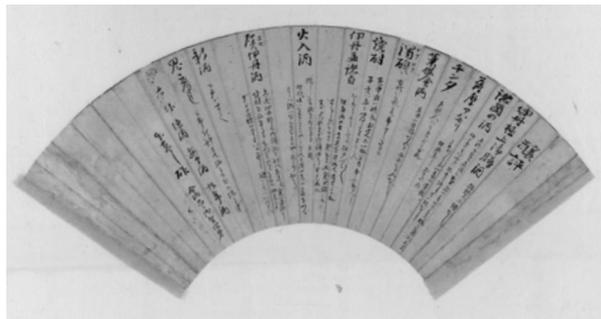


図6 「聖賢扇」修復後（扇子仕上げ前）

宋六君子図

宋六君子図
しよかんげつ
菴関月・中井藍江筆、頼春水賛。中国宋代を代表する

周敦頤・程顥・程頤・張載・司馬光・邵雍の六人の学者を描いた絵。周敦頤・程顥・程頤を菴関月が、張載・司馬光・邵雍を、関月の弟子・中井藍江が書いている。画

材として特にこの六人が選ばれているのは、朱子がこの六人の絵に賛文を書いていることによる。原画の所在は未詳であるが、賛文は、『朱子文集』巻八五に、「六先生画像賛」と題して収められている。春水の書いた賛は、これを筆写したものである。賛が書かれたのは寛政九年（二七九七）。懷徳堂は寛政四年に全焼し、寛政八年に再建落成している。おそらく、堂の再建を祝って、これらの画と賛とが作成され、竹山に贈られたものと思われる。もとは懷徳堂講堂の東側梁上に掲げられていた。

↓修復前

本紙に劣化、変色が見られた。また修復歴があり亀裂箇所などに補彩が見られたが、逆に鑑賞の妨げとなっていた。

↓修復後

本紙を純粋水で洗浄し、旧裏打紙を除去。本紙の旧補彩箇所は絵の具を除去し、新たに補彩を施した。欠損部分には本紙と似寄りの和紙で繕いを施した。

入徳門聯

中井竹山の筆になる竹製の聯。懷徳堂の庭に通ずる「入徳門」の両側に掲げられていた。漢文は、「学に力めて以て己を修め、言を立てて以て人を治む」と読む。全体

が特定の古典に直接基づくものではないが、「力学」は努力して学ぶこと、「修己」は自己を修養すること、「立言」は他者に伝えるべき立派な言説・学説を樹立すること、「治人」は人を統治することで、各々中国の古典に由来する語である。この聯は、こうした古語を組み合わせたもので、自己の修養努力と、それを基にした社会的活動（経世）の重要性を説く内容となっている。

↓修復前(図7)

経年による汚れが見られ、文字・落款の一部が剥落していた。また、乾燥による亀裂があり、補強用のガムテープが貼られていた。



図7 「入徳門聯」修復前

図8 「入徳門聯」修復後



↓修復後 (図8)

有機溶剤を用い、ガムテープを除去。膠水溶液を用い、文字・落款に剥落止めを施した。割れていた箇所をアクリルエマルジョンで接合し、外観を損なわないよう裏側から木材を使って補強した。

中庸錯簡説

従来の『中庸』テキストの章の並びに誤りがあるとする懐徳堂独自の学説を述べたもの。この説は初代学主の三宅石庵によって立てられ、第四代学主の中井竹山が補完した。「錯簡」とは、文章が間違つて前後しているという意味。紙が発明される以前の書物は、竹や木の筒に文字を記し、それを並べてひもで綴じたため、一旦、そのひもが切れると筒の順序は交錯してしまい、これを「錯簡」と言ったのがこの語の由来である。

↓修復前 (図9)

本紙が硬く、多数の縦折れが見られた。本紙・縁ともに虫損が見られた。本紙の肌浮きが見られた。総裏紙のフォクシングが著しかった。特に、本紙の折れは卷子閲覧を非常に困難にしていた。



図9 「中庸錯簡説」修復前

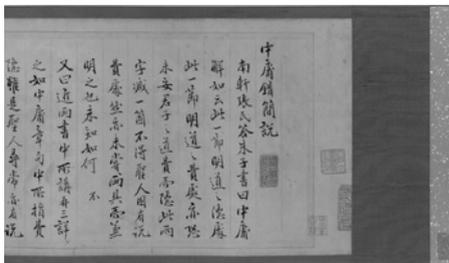


図10 「中庸錯簡説」修復後

↓修復後 (図10)

本紙を卷子装から解体し、膠水溶液を用いて、墨、落款に剥落止めを施した。旧裏打紙を除去し、楮紙にて生麩糊を用い、肌裏打を施した。折れの箇所にて折れ伏せを入れ、表紙、見返しは新調とし、羽二重で包み、太巻き芯付き、桐箱収納とした。

華胥国物語 版木

中井履軒『華胥国物語』の版木。履軒の曾孫に当たる中井木菟麻呂が同書を刊行したときに彫らせたもの。版面に「明治十九年（一八八六）二月十日版權免許」同年五月刻成」の表記が見える。計十枚からなり、各版木の両面に文字が彫られ、表紙および本文十八丁分の版面となっている。版木の厚さは二・四cm。匡郭内寸法は縦十八・九×十三・九cm、每半葉十行、版心には丁数が彫られている。明治期の版行の様子を知りうる貴重な資料である。

↓修復前

木箱の側板が反っていて、竹釘から外れており、木組みが外れて隙間が見える状態であった。指蓋の下框が外れていた。収納は版木を直接積み重ねたものを木箱に入れる形態であるが、箱の中で版木が動くため不

安定であった。

↓修復後

木箱を解体して組み直し、隙間を補填して、版木がきちんと収納できるようにした。版木そのものには修復を加えず、木箱を入れるアーカイバル箱（中性保存紙）を作成して収納した。

懷徳堂絵図屏風

明治四十四年（一九一）十月、府立大阪博物館美術館において開催された懷徳堂展覧会に出品された屏風。中井家子孫の中井木菟麻呂が江戸時代の懷徳堂学舎に関する絵図・記録類を屏風一雙に貼り付けたものであり、各六面、計十二面からなる。各面は縦一八五cm×横八十五cm、十二面をすべて展開すると幅が一〇二〇cmになる大型の屏風である。創立時以来の懷徳堂の絵図・平面図が多数貼り付けられており、平成十三年に制作されたバーチャル懷徳堂（CG）の基礎資料となった。

↓修復前

経年劣化による本紙の焼け、変色が見られた。表の地張りに隅皺が見られた。裏張りに破れがあった。前尾背に経年による変色が見られた。本紙にフォクシングが見られた。縁の散らし金物が欠失していた。裏側

の落款収納札が天地逆に貼り付けられていた。収納用の木箱が傷んでおり、出し入れしにくい寸法であった。
↓修復後

縁を外し、裏張り、表張り、尾背を一旦解体した後、隅皺の見られた表張りを修正し、破れの見られた裏張り、および変色していた前尾背を新調して張り替えた。落款収納札を張り替えた。欠失していた金物を似寄りのもので補った。木箱を新調し、旧箱書きを、新調する木箱に張り替え埋め込んだ。

こうして修復された貴重資料を懐徳堂展に出品したわけであるが、改めて修復の意義と恐ろしさを感じずにはいられなかった。

例えば、「帰馬放牛図」のように、これまでほとんど構図さえ読み取れなかった資料があざやかに見えるようになった。構図も細部も再現され、この絵の主題は何なのかという疑問が新たに生じて、研究が大いに進展したのである。また、「入徳門聯」も、大きな亀裂が修復され、文字の判読が容易になった。これらは修復の大きな意義と言ってよからう。

ただ、修復そのものの持つ恐ろしさにも留意する必要がある。右の「帰馬放牛図」も、いつかの時点で欠損部

に補彩が行われていた。それが本紙になじんでおらず、このたびの修復では、まずこの補彩部分を除去する必要があった。また、「入徳門聯」も、いつかの時点で亀裂部の裏側からガムテープが貼られていた。亀裂をなんとか食い止めたという意識であったと思われるが、ガムテープが資料の劣化に拍車をかけることは言うまでもない。このように、修復とは、それを行った人の見識が如実に表れてしまう作業である。しかも杜撰な修復は、後世に大きな禍根を残す。くれぐれも慎重に行わなければならないのである。見事によみがえった懐徳堂資料から、資料修復の重要性が痛感されるであろう。

注

(1) 展示資料については、いわゆる図録は制作していないが、全資料のリストと簡潔な解題を『懐徳堂展 展示資料目録』（財団法人懐徳堂記念会、大阪大学大学院文学研究科懐徳堂研究センター、二〇一〇年）として作成し、来場者に無料配付した。

(2) これら資料修復の詳細については、拙稿「よみがえる懐徳堂資料」（『大阪大学図書館報』第四十三巻一号、二〇〇九年）、および「谷文晁「帰馬放牛図」に描かれた花―懐徳堂展によせて―」（『大阪大学図書館報』第四十四巻二号、二〇一〇年）を参照。